

平成 2 5 年 1 1 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

青梅市内にある遺跡の現状 その 9

霞川における遺跡の現状は、天寧寺の霞池を源流とする霞川本流に沿うものと、塩船観音寺西方から流出する支流に沿うものの二方向でご案内を進めてきました。霞川本流に沿ったご案内の前回第 293 号は、師岡の馬場遺跡まで終了し、今回はその続きとして、野上の春日神社から東方をご紹介します。

①で示した遺跡は、野上の春日神社の敷地および東方にある運動場が該当し、『市街道遺跡』（いちかいといせき）と呼ばれています。

ここは縄文時代早期後半、前期前半、後半、中期、後期前半、古墳時代後期、奈良時代、平安時代に属する遺跡です。縄文時代の遺物では、土器片や石器が採集されており、東側では昭和 48 年 3 月に発掘調査が行われました。そのきっかけは、広場の造成の際に竪穴住居跡が数か所発見されたことに始まります。その中で、竈が既に露出している住居跡があったため、その住居跡に対し発掘調査が行われました。その結果、床面からは甕が 2 点（高さ 23cm と 30cm）、甑 1 点（高さ 29cm、下部に長径 8 cm の穴がある）、鉄器 2 点（鎌と鍬？）、砥石 1 点（砂岩）、糸を紡ぐための紡錘車（滑石製の円錐台形、上部径が 3.4cm、下部径が 4.5cm、高さ 2.9cm）が見つかりました。時代からすると、古墳時代（6 世紀後半）のものであることが判明しました。児童公園や運動場、神社の境域などが遺物の散布域となっていますが、遺物を見つけることは困難となっています。また、この遺跡の東方 150m 付近や南方 50m 付近の所も遺跡として確認されており、古墳時代から平安時代にわたる土師器や須恵器が採集されています。

②の遺跡は勝沼城址から東へのびる尾根の先端の部分に当たるところで、北側の水田や畑などとの比高 3m の所に位置しています。遺跡の範囲としてはやや広めですが、東側には住宅が立ち並び、遺跡としての全体像はつかむことができません。この遺跡からは縄文時代中

期の初頭と後半、そして、後期前半の土器が見つかっており、そこから集められた石などの中で縄文土器や土師器のかけらが観察できます。

③塩船観音寺西方から湧出した支流が霞川本流に合流する所が遺跡となっています。谷野真浄寺の南方から東に延びる台地の先端に位置し、遺跡と水田の比高はほとんどなく、霞川本流域では最も低い位置にある遺跡です。縄文時代中期の土器や打製石斧が表面採集され、土師器や須恵器のかけらも採集されています。現在、その場所は運動場や茶畑などが占めており、遺物の採集は困難となっています。

④この遺跡は加治丘陵南麓につきだした小台地上に位置し、昭和 45 年農道の拡張工事の際に発見された遺跡です。

地表下 60cm の所に竪穴住居跡が発見され、土師器の甕や須恵器片などが出土しました。中でも完形に復元された土師器の甕には帯状にカーボンが付着しており、竈に掛けていたものであろうと推測されています。また、他の土師器などの形式から奈良時代のものであろうとされています。住居跡は一辺が 2.8m の方形で、50cm ほど掘り下げた竪穴の、東の壁には竈が作られていました。現在は道沿いに住宅が立ち並び、遺跡の面影はまったく無くなっています。

⑤は丸山遺跡とよばれ、加治丘陵裾部につきだした舌状台地に位置し、霞川流域では最大級の遺跡です。縄文時代の遺跡として古くから知られており、採集した土器を見ると、縄文時代中期前半と後半の遺跡であることがわかり、撥形の打製石斧や古墳時代以降の土師器や須恵器のかけらも見つかっています。

また、この遺跡のすぐ北側の広大な段丘上も丸山遺跡⑥と呼び、西側の沢を隔てた山裾の小さな台地や東側の山裾に沿ったいくつかの台地も遺跡として確認されています。特に段丘上に位置する丸山遺跡⑥は、広さは 1 万 2 千㎡にも及ぶ広大な遺跡で、昭和 62 年 8 月から平成 2 年 9 月にかけて宅地開発や市道の建設により発掘調査が行われ、その全貌が明らかになりました（その後小規模の発掘は逐次調査が行われました）。

その結果、岩宿時代の遺物として尖頭器 9 点（破片を含む）や細石刃、黒曜石で作られて細石刃核などが見つかりました。縄文時代では、環状に配置された住居跡が 40 軒弱見つか

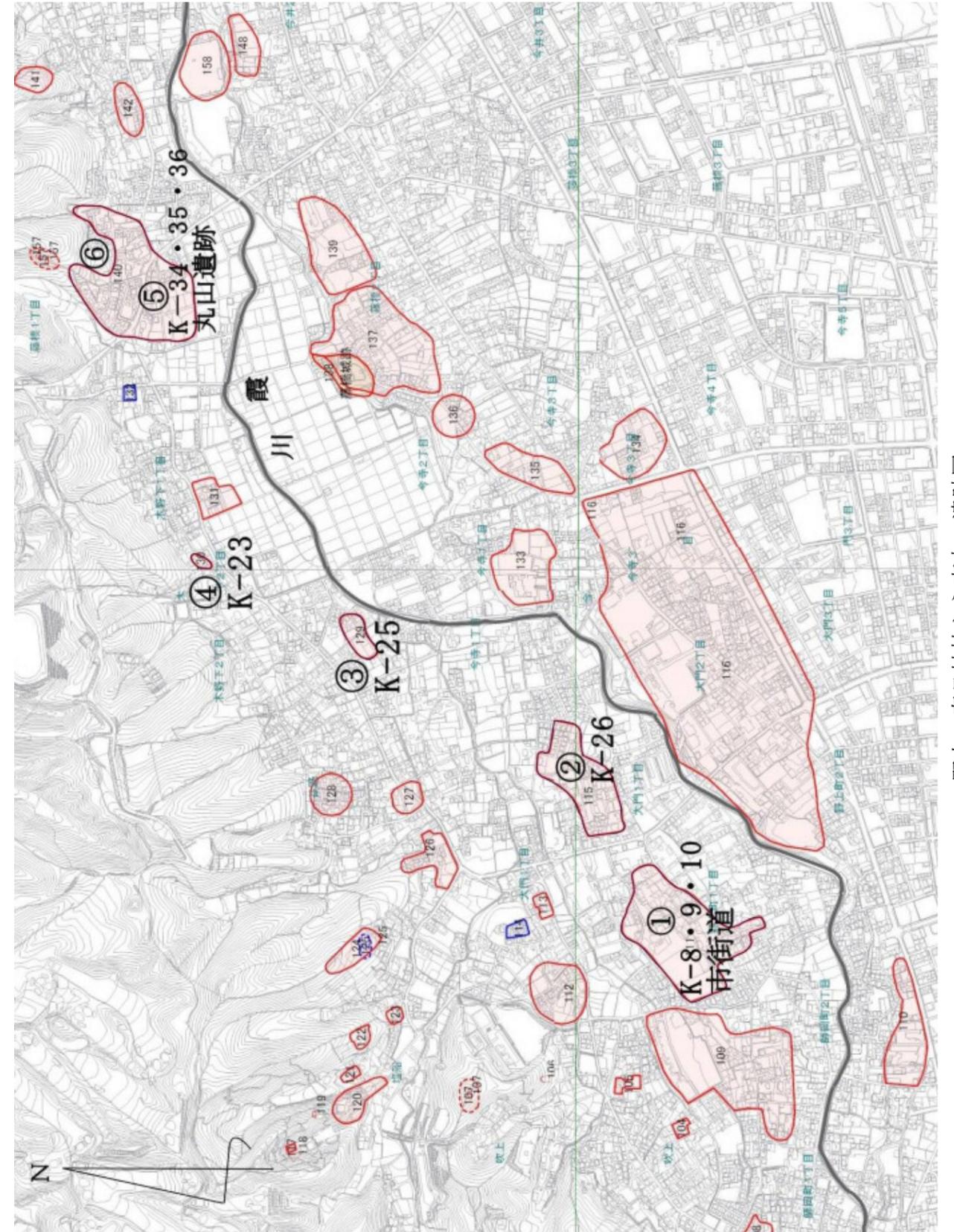
土器の形式では阿玉台式や勝坂式、加曾利E式そして堀之内式土器も見つかっており、縄文時代中期なかばから後期前半の遺跡であることがわかります。特に加曾利E式土器の完形品数点は作った当時の形を留めています。

その他特殊なものとしては、ミニチュア土器5個、多数の打製石斧と磨製石斧数点、石皿や磨り石、錐や完形の矢じり8点、首から胸までで、両手の広げた状態の土偶や、肩から頭部にわたる顔面が明確な土偶など。そして土偶状土製品(土板?)や耳飾り大小12点など、数多くの遺物が出土しました。

また、古墳時代以降の住居跡は14軒見つかり、平安時代の住居跡は1軒見つかりました。特に、南東側に位置する焼失家屋のあとから長胴甕7個分、鉢と坏、墨書杯、鉄製鎌などが見つかり、当時の生活を物語るような発掘結果となりました。現在は遺跡の敷地のほとんどが住宅地になり、耕作地は少なく、表面採集は不可能となっています。

(シリーズ次号に続く)

(文責 鈴木 晴也)



野上の春日神社から東方の遺跡図